

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤忠重

西澤國護 長谷見敏 古川百合子 星田啓子

投句・選句 伊賀山そらお 熊谷國男(作者表記は「く」) 後藤とみ子 小早健介

朱牟田静雄(惠洲) 高橋康敏 土谷堂哉 豊田穰 中川雅夫 福島正明

古田昇 宮内規雄 山崎亜也 山内天牛 渡邊盛雄

投句のみ 山田啓子(けい子)

選句のみ 梅崎哲雄(作者表記は「くす」) 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆

早川允章 山本三恵

【互選句】

十二点 ◎堰落つる水の煌めき初燕 康敏 (そ・孤・く・五・孝・清・堂・ゆ・び・允・昇・規)

十一點 キヤラメルの紙で鶴折る春炬燵 康敏 (忠・と・千・恵・堂・雅・昇・啓・亜・天・盛)

七点 春來たる老いに眩しき素足かな 堂哉 (そ・くす・た・○龍・國・百・規)

花冷や聖書の上の丸眼鏡 康敏 (紀・恵・清・百・亜・三・天)

◎初蝶の朝日を浴びて躍り出づ 昇 (孤・○康・清・ゆ・允・百・啓)

六點 つばめ来て宙に音符を撒き散らす 孤舟 (くす・と・千・孝・康・三)

三一一トランペットを星空へ 全 (健・五・康・堂・隆・○規)

◎合格と声変わりして報せ来ぬ 健介 (紀・孤・恵・龍・○允・天)

◎白子(しらす)食ふこれ皆命と思ひつつ 惠洲 (孤・と・龍・○百・○三・○盛)

八掛に緋色を見せし春の風 啓子 (紀・た・清・雅・亜・盛)

除染後の田に戻りたる蛙みて 全 (忠・と・恵・ゆ・○隆・○正)

八十年もむかしを生きる母の春 全 (くす・龍・隆・び・百・規)

五點 老い三人若者街で呑む麴 忠彦 (紀・龍・雅・隆・正)

それぞれに話すことある彼岸かな 五郎太 (○そ・くす・○と・千・○孝)

愛でるより自撮り忙し桜東風 健介 (そ・ゆ・隆・昇・盛)

風を呼ぶほのと明るき雪やなぎ 規雄 (孝・允・び・正・昇)

四點 春の海風ぎてはるかに富士の峯(相模湾)そらお (た・國・規・び)

八畳間箆笥の上の雛と寝る 忠彦 (と・隆・び・天)

魚氷に上り満天の星となる 孤舟 (く・康・允・三)

釣宿の魚拓の跳ねて春來たる 全 (忠・五・恵・康)

◎風に乗り香り運ぶや沈丁花 ただしげ (孤・ゆ・雅・國)

湾よぎる汽車の古道や土手萌ゆる びん (紀・健・雅・啓)

三点

◎名も知らぬ木々も芽吹くや雑木山

ただしげ

(孤・國・雅)

いかなこのくぎ煮甘めは嫂の味

とみ子

(○紀・た・亜)

◎満開の桜を待たず杏子逝く

康敏

(○孤・く・盛)

久々に花咲く下で車座に

ゆたか

(千・康・規)

風船や「メメント・モリ」の声のこし

百合子

(紀・五・三)

骨上げに額よせるや春彼岸

全

(堂・忠・啓)

◎波静か魚津の海の蟹気楼

けい子

(孤・く・啓)

二点

◎卒業後懐かしきかな師の渾名

忠彦

(孤・國)

梅満開じつくり見よと赤信号

全

(千・ゆ)

晩の鐘隣の部屋は受験生

五郎太

(く・健)

夕富士もいつか溶けゆく臍かな

全

(くす・清)

厩には張りぼての馬花の城

とみ子

(清・三)

春一番球場揺らす百マイル

千恵

(五・○昇)

いつもの家自慢気に咲くミモザかな

全

(國・正)

◎また忘る男雛女雛の右左

恵洲

(忠・孤)

僧に和し妻と読経の彼岸かな

堂哉

(そ・び)

本尊の御名存ぜぬが花の寺

びん

(健・恵)

H3ロケット

春空に無念を結び指示破壊

啓子

(健・○堂)

春泥を撥ねつつ母に抱きつく子

けい子

(く・昇)

コルセット締めっぱなしで弥生果つ

天牛

(紀・正)

シルクロードの果ては淡路の百千鳥

盛雄

(正・啓)

一点

やめてくれ！下手な掛け声春芝居

紀久男

(天)

(歌舞伎座公認の大向う)

見得決めて写楽の首絵に春芝居

全

(啓)

春場所や大関に飲み負けた頃憶ふ

全

(啓)

(ミナミの料亭で北葉山と茶碗酒呑み酔い潰れた)

花粉症薬効きすぎ夢うつ

忠彦

(紀)

素魚の黒眼一気に呑み込まれる

孤舟

(天)

たつぷりと残雪被く千枚田

くにお

(五)

清明の蓮根を植うる泥田かな

全

(百)

梅園で客はみな下る常磐線

五郎太

(亜)

春の鴨前後を保ち泳ぎくる

全

(紀)

春雷や聡太六冠無双かな

千恵

(盛)

見晴らせば影絵の富士よ春夕焼

全

(た)

春眠や一年ぶりに妣に会えり

全

(孝)

江刺から届く便りや鱈群来

ただしげ

(紀)

電池切れ時計止まって朝寝坊

全

(紀)

白装束同行(どうぎょう)二人の遍路旅

全

(紀)

富士見んと石段幾段風光る

堂哉

(紀)

落花舞う出湯に浸り身を癒す	ゆたか	(そ)
桜葉の香り漂う長命寺	國護	(た)
初孫のつぶらな瞳春温み	全	(允)
風吹いて春は名のみの山下り	全	(紀)
老いし我とゆれて唄うや竹の秋	雅夫	(孝)
熟年を庭と語るや妻の春	全	(堂)
山は上野弓引く裸像花おぼろ	びん	(紀)
藍うすき小さき菫の花と逢う	全	(紀)
ゴンドラやうらら乗り出す窓掃夫	全	(紀)
卒業や子が親を越す第一歩	正明	(忠)
初桜も驚いている二刀流	全	(紀)
軒つたう雪解け水の輪廻かな	百合子	(龍)
わが母は認知症とやおぼろ月	全	(〇くす)
この春も黄泉の国から便りなし	全	(紀)
鎌倉の詩想ふくらむ木の芽時	昇	(紀)
笑み浮かぶ花の重さや予報官	啓子	(健)
野遊や遺影の妻に手を合はす	規雄	(紀)
「温水」を選ばずなりぬ三月尽	亜也	(紀)
黄砂降る小倉は如何に舊き友	全	(紀)
初蝶は木々の鳥追ふ遊びかな	けい子	(千)
病院は桜の話題とんと無し	天牛	(紀)
面影のなき休み田へ揚雲雀	盛雄	(紀)
待ちかねの日の下開山春の夢	全	(紀)

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

【句評】

十二点句 ◎堰落つる水の煌めき初燕

康敏

孤舟さん・・・多摩川上流の堰付近で、水面を掠めて光となって燕が飛ぶ。
くにおさん・・・堰を落ちてしるがねのように輝く水の上を初燕が勢いよく飛翔している。
作者には春の到来を実感した一瞬を写生句で切り取った。
五郎太さん・・・水が跳ね、光るところに今年初の燕がきて、宙を切ったのでしよう。鋭い感覚
だと思えます。
堂哉さん・・・迸る水と燕が目には浮かびます。春の喜びを感じました。
ゆたかさん・・・初燕と水の煌めきの取り合わせがいいです。

十一重点句 キヤラメルの紙で鶴折る春炬燵

康敏

とみ子さん・・・折り紙と春炬燵の取り合わせが、よろしいと、思います。
恵洲さん・・・随分退屈しているのだろうなあ、と想像しつつ。それに、キヤラメルの包み
紙で鶴を折る指の器用さに敬意を表して。
堂哉さん・・・お孫さんが、飴を舐めながら不思議そうに見ています。おじいさんも久しぶ
りに懐かしい味を楽しみながら。

亜也さん・・・キャラメルになぜか昭和を感じた次第。
盛雄さん・・・指先の器用な女性がお孫さんに教えている景でしょうか。春炬燵の季語が良
い。

天牛さん・・・旧い人間はキャラメルと聞くと黄色い箱を思い出します。のどかですね!!

七点句

花冷や聖書の上の丸眼鏡

康敏

恵洲さん・・・地味な句だが、ちよつと風変わりな静物画を思わせ、見える句。
亜也さん・・・そういえば坂本龍一も丸眼鏡でしたね。
天牛さん・・・拡大鏡を置いて一服されたのでしょうか。

春来たる老いに眩しき素足かな

堂哉

ただしげさん・・・老いのわが身も同感です。
龍平さん・・・喜びの全てが始まる予感。ヴィヴァルディ「春」も聴こえてきました。
※康敏さん・・・「素足」は夏の季語。季重なりです。

参考「おそろべき君等の乳房夏きたる 西東三鬼」

◎初蝶の朝日を浴びて躍り出づ

昇

孤舟さん・・・朝起きて雨戸を開けると、朝日を浴びて蝶が舞っている。
康敏さん・・・朝日の中を飛翔する初蝶、春のイメージが膨らむ。人を元気にさせて呉れ
る句だ。

ゆたかさん・・・初蝶の嬉々とした様子が目に浮かびます。

六点

つばめ来て宙に音符を撒き散らす

孤舟

とみ子さん・・・楽しく軽快な曲が、聞こえるような!

康敏さん・・・南国から飛来し、飛び交う燕の群れを音符に見立てた豊かなイメージ。

三恵さん・・・思い浮かべると「音符」を「撒き散らす」ってまさしくぴったりの表現ですね。

三二一 トランペットを星空へ

孤舟

康敏さん・・・三二一が季語か? 『角川俳句大歳時記』新版に、春の季語として「東日本大
震災の日」が、傍題に「東日本大震災忌」 「三月十一日」が載っている。例句
に「東日本大震災忌狼声す 高野ムツオ」 「三・一一神はゐないかとでも小さ
い 照井翠」がある。季語と認識して良いと思う。なお「東北忌」「原発忌」
「福島忌」を使っている俳人もいるが、未だ歳時記にはない。この忌日に、
作者は犠牲者の魂と言える満天の星に向かって万感の思いで鎮魂曲を吹いて
いる。

堂哉さん・・・トランペットの音は切ないですね! 下五で一層切なさが募ります。

隆さん・・・「星空は亡き人が道に迷わず天国へ行けるようにと導く明かりだった」と賛辞
あり。当夜の星に見入った人が多かった事実はあまり伝わらない。

規雄さん・・・「三二一」は「東日本大震災」だと思います。「二年前の当日のことを思い、
トランペットの高い静かな音を、満天の星空へ響かせている作者の優しい気持
ちを思いました。

◎合格と声変わりして報せ来ぬ

健介

孤舟さん・・・変声期後の大人びた声で、はにかみながら、しかも嬉しそうに「合格したよ!」。
恵洲さん・・・親戚のお子さんかな。合格も嬉しいし、成長の証しの声変わりも嬉しい。
龍平さん・・・ナルホド 声まで変わるか。

允章さん……声変わりとおあるから、中学校の入試でしょう。作者はお孫さんから合格の報を聞いてほっとしたことでしょう。

天牛さん……お孫さんも成長されて、お楽しみですね。

◎白子(しらす)食ふこれ皆命と思ひつつ 惠洲

孤舟さん……一瞬「殺生戒」を思うも「まあ、いいか！」

とみ子さん……自然の恵みに感謝しようと、このお句から知らされました。

龍平さん……喰われる白子の自虐的快感が美味しいのでは。

三恵さん……自分も食材に「命」を感じることがあります。これは捕食者としてよいことがまずいことなのか不安になります。今回の句会にある出句

〳風船や「メメント・モリ」の声のこし〳が想起されます。

盛雄さん……弘法大師の教えは今に生きる。凄い一句。

八掛に緋色を見せし春の風 啓子

ただしげさん……春の風のいたずらで八掛の緋色が顔を出す、なまめかしい情景を上手に詠んでいる。

亜也さん……裾とせずに八掛としたことの功。

盛雄さん……和服姿に風のいたずら。粋な一句が出来ました。昭和は遠くなりけり。

除染後の田に戻りたる蛙ゐて 啓子

とみ子さん……「蛙ゐて」に作者のお気持ちが察せられます。

惠洲さん……戻ってきたのが人でなく蛙なのが面白い。

ゆたかさん……除染と蛙の取り合わせ、目の付けどころが素晴らしいです。

正明さん……原発は、近道したら犬が居た、という諺通りです。戻るのは蛙ぐらい。

隆さん……原発は自然を抑えた科学観。でも、人間も蛙も哀しいかな自然のひとつ。

「畔道」は除染の対象外とか。「蛙ゐて」に深い余韻あり。

八十年もむかしを生きる母の春 啓子

龍平さん……気持ちがお若い。幸せな長命タイプの方でしょう。

隆さん……時を自在に生きる。長寿の妙か。「生きるのも芸の内」の格言が生きている。

五点句 古い三人若者街で呑む臈

忠彦

隆さん……漠とした未来。このときばかりは忘れそう。

それぞれに話すことある彼岸かな 五郎太

とみ子さん……法事の席でしょうか。久しぶりに会うとそういう気持ちになりますね。

孝岳さん……お彼岸の墓前で亡き父母、姉、叔母のことを思い起こして、それぞれに話しかけている非日常を自覚させてくれる秀句です。

愛でるより自撮り忙し桜東風 健介

ゆたかさん……滑稽な味があります。

隆さん……スマホで撮った映像は、自分の目だけで見た映像に比べ忘れ易い」とか。真理と齟齬する人の行為は、桜東風を誘う。

四点句 春の海風ぎてはるかに富士の峯(相模湾) そらお

ただしげさん……波の静かな相模湾を経て浮かぶ富士、一幅の絵を見るよう。

※びんさん……富士山の長い裾野まで一望する絶景は確かに相模湾ならではでしょうね。

でもこの「相模湾」は「字の本体に取込み消化されるべきでは。

八畳間箆筒の上の雛と寝る

忠彦

とみ子さん……忙しく段飾りを飾れない年のお節句あるあると、共感いたしました。
隆さん……雛も友、わが守り神。

天牛さん……気は心。小さい雛人形をちよこつと飾つてある雰囲気がいいですね。

魚氷に上り満天の星となる

孤舟

くにおさん……「魚氷（ひ）に上（のぼ）る」は初春の季語。春になると魚が氷の上に躍り出るといふ。そんな夜には冴返る満天の星が煌いている。身の引き締まる早春の一句。

康敏さん……七十二候の「魚上氷」は二月十五日〜十九日、この頃になると魚が氷の上に飛び出して来るといふ。それを満天の星に昇華せしめた：素晴らしい発想だ。

釣宿の魚拓の眺ねて春来たる

孤舟

五郎太さん……春先の魚の元気を魚拓を見ながら思つたのでしよう。「眺ねる」が活きています。

恵洲さん……魚拓の魚が撥ねるはずはないが、春を待ち兼ねていた釣り好きの心のはずみと取つて。

康敏さん……冬の間じつとしていた川魚が、春の到来と共に動き出した。釣宿に飾つてある魚拓までも。

◎風に乗り香り運ぶや沈丁花

ただしげ

孤舟さん……沈丁花は夜目でも香りで存在感を誇示している。

ゆたかさん……沈丁花の香りが漂ってきます。

湾よぎる汽車の古道や土手萌ゆる

びん

啓子さん……昭和を感じさせ、旅情を掻き立てるようです。もはや廢線になった？あるいは別のルートになつて使われていない線路でしょうか、今は土手の草が萌えるばかりですが、そこに横たわつて空を行く雲を眺めていたい気がします。

三点

◎名も知らぬ木々も芽吹くや雑木山

ただしげ

孤舟さん……林の中の様々な樹々が一斉に芽吹き、緑に覆われている。

いかなごのくぎ煮甘めは嫂の味

とみ子

ただしげさん……瀬戸内の島々でのいかなご漁、懐かしく思い出しました。

亜也さん……時に句会でごちそうになるお礼まで。

◎満開の桜を待たず杏子逝く

康敏

孤舟さん……桜脚でも有名な黒田杏子さん。3月11日山梨・境川村での「飯田龍太を語る会」の講演直後に倒れ帰らぬ人に。

くにおさん……作者と故人との関係はわからないが、黒田杏子さんは3月13日、脳出血で急逝された。講演先の山梨県笛吹市の病院で亡くなられた。84歳。代表作に

「かなしまむ哭かむ嘆かむさくら舞ふ」（『俳人名鑑』平成26年俳人協会編より）。杏子さんは地方新聞の「新潟日報」の文芸欄の選者を30年余務めて来ている中での訃報であった。

盛雄さん……寂聴さんとの俳句談議はとても良かった。才女二人の何事も識りつくした話振りは印象に残る。小生も俳句初学の頃（2009〜2011年）日経俳壇に度々取り上げて貰いました。急逝とか……ご冥福を祈ります。

久々に花咲く下で車座に

ゆたか

康敏さん・・・時事俳句を嫌う俳人が多いが、コロナ禍の終焉を告げる佳句として敢えて採らせて頂いた。

風船や「メメント・モリ」の声のこし

百合子

五郎太さん・・・「今を大事に生きよ」とは誰が言ったのでしょうか。風船が人の手を離れて、空に上って行きます。実景なのか、遣された人が幼年時代を思い出しているのかもしれません。風船と、ラテン語の組み合わせが巧みと思いました。

骨上げに額よせるや春彼岸

百合子

堂哉さん・・・コロナ禍の間は骨揚げの人数を制限され、寄せる額は僅かでした。以前は確かに両側からあれこれ思い出を話ながら壺にいれましたね。

啓子さん・・・お別れの最後の刻。心を込めて死者を想い骨上げをすると、自然と額が寄せられそれぞれの想いがひとつになつていくようですね。

◎波静か魚津の海の蜃気楼

けい子

孤舟さん・・・富山・魚津は蜃気楼の名所。

くにおさん・・・富山湾の不思議な自然現象、蜃気楼。雪解水で冷やされた海水の温度と温かい海上の気温との差で光の異常屈折により思いもよらない景色が空中に浮かぶ。作者は、晩春の貴重な一句を魚津で得たのである。

二点句 ◎卒業後懐かしきかな師の渾名

忠彦

孤舟さん・・・先生の本名は忘れても渾名は覚えているもの。但し「卒業後」に季感ありや？

梅満開じっくり見よと赤信号

忠彦

ゆたかさん・・・赤信号が面白いです。

晩の鐘隣の部屋は受験生

五郎太

くにおさん・・・晩鐘を聞きながら、明日本番を迎える受験生を気にしている。同時に、作者自身の受験をした頃を懐かしんでいるように思える。上五は「晩鐘や」では？

春一番球場揺らす百マイル

千恵

昇さん・・・今年のWBCは侍ジャパンが優勝！大谷選手が投打の活躍でMVP。注目される中、あの若さであっさりやつてのけるのが凄い。さすがスーパースター。160キロ台の豪速球が冴え渡り球場を沸かせた。春一番の季語が効いています。

◎また忘る男雛女雛の右左

恵洲

孤舟さん・・・数年振りの雛飾り。お内裏様は向かって左？右？

本尊の御名存ぜぬが花の寺

びん

健介さん・・・世は有名寺院の高名本尊ばかりに傾倒しがちなところ、作者の姿勢や良し。恵洲さん・・・みごとな花に誘われて行きずりの知らないお寺の本道にお参りしたのかな、こういうことってあるよね、と思わせる句。

亜也さん・・・偉そうにしないで、拜んで行ってください。これもご縁です。

H3ロケット

春空に無念を結び指示破壊

啓子

堂哉さん・・・関係者の無念はいかほどでしょう！関係者だったら、まして責任ある立場だったら！胸が締め付けられました

春泥を撥ねつつ母に抱きつく子

けい子

くにおさん・・・送迎バスを降りて、春泥を背中まで撥ねた園児が母親に抱きつく。母親も泥を気にしながらやさしく子を抱き締める。微笑ましい母子の姿が目には浮かぶ。

コルセット締めつばなしで弥生果つ

天牛

正明さん・・・お呼ばれの多い春先、着替えも疲れ、呆然としての有様。

シルクロードの果ては淡路の百千鳥

盛雄

正明さん・・・出来過ぎかも、議論する価値がありそうです。

啓子さん・・・大きな景。夢も運ぶシルクロード、その果ては・・・。瀬戸内を愛する作者

の想いでしょうか。

一点句 やめてくれ！下手な掛け声春芝居

紀久男

(歌舞伎座公認の大向う)

天牛さん・・・そうでしょう、そうでしょう！素人の掛け声は邪魔になるでしょうね。

素魚の黒眼一気に呑み込まれる

孤舟

天牛さん・・・少年時代から宍道湖のしらうおで育ったのですから黒目の実感が湧きます。

梅園で客はみな下る常磐線

五郎太

亜也さん・・・特急も臨時停車するんじゃないかなかったかしら？

春雷や聡太六冠無双かな

千恵

盛雄さん・・・大谷選手同様にこの人は「一人で無い」かも、まさに春雷。

※康敏さん・・・前回「や」「けり」の併用がありました、「や」「かな」の切字の併用も

タブーです。「春雷や聡太六冠無双なる」では。

見晴らせば影絵の富士よ春夕焼

千恵

ただしげさん・・・春の夕焼、影絵のような富士の情景が目には浮かぶようです。

電池切れ時計止まって朝寝坊

ただしげ

※康敏さん・・・「くだからくした」原因と結果の表現では、理屈であり詩的感動を呼びません。

白装束同行(どうぎょう)二人の遍路旅

ただしげ

※びんさん・・・遍路笠にはもともと「同行二人」と書込まれている。巡礼者は弘法大師さま

と共に在りとの意だが、本句の場合、さてどなたかとの二人旅でしたのか？

それはともかく、全体が遍路という季語に「即きすぎ」では。

桜葉の香り漂う長命寺

國護

ただしげさん・・・作者の意図とは異なるかもしれませんが、長命寺の桜餅を思い浮かべました。

山は上野弓引く裸像花おぼろ

びん

※康敏さん・・・西洋美術館のブルデルのヘラクレス像でしょうが、残念ながら三段切れ

です。「ブロンズの弓引く裸像花おぼろ」では。

熟年を庭と語るや妻の春

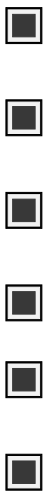
雅夫

堂哉さん・・・さて、夫は何と語るのでしょうか？

黄砂降る小倉は如何に舊き友

亜也

※孤舟さん・・・三段切れのような気がしますが・・・。



【次回青葉会予定】

令和五年四月二十七日(木)

時間：十二時～十六時半

会場：世田谷区三軒茶屋施設 しやれなあと 4階会議室

◇ご出席者は当季雑詠5句。投句は2句まで。 事前にPの入力による清記を作成しますので、**ご出席者の出句予定句及び投句を当方(星田)に頂戴致します。**

締切：四月二十五日(火)中。

星田メール或いはFAX (03-3421-9772) 宛頂戴できれば当日配布の清記に反映致します。

☆三茶しやれなあと 東京都世田谷区太子堂 2-16-7 茶沢通り**宝くじ売り場が目印のビル**

※※※※※※※※※※

青葉会報

一、今回は孤舟選者をはじめとして前回は新人として選句のみでの参加だった百合子さんが句会デビュー、十名のご出席でした。投句は最長老でご入院治療中(現在はご退院・ご自宅療養中)の天牛さんはじめ十六名からの投句により出句は全89句。ご出席者の皆さまの選句作業後、五郎太さんの司会のもと、各自自選句を披露いただき、またその後日ご出席者以外の皆さまからの選句を頂いた結果、康敏さんが最高点と次点を獲得されました。

寄贈の飛騨の蓬萊、高知の南、百合子さんの初参加ご挨拶として国立市の評判銘菓プラムフィナンシェや、持ち寄って頂いたお煎餅、チーズなどを賞味しながら和気藹々の句会でした。

二、通常はこの欄に 関係者近詠として、「森の座」「きさらぎ」からの抜粋を掲載させていただいておりますが、概ねの会員の皆さまにはお知らせ申し上げた通り(一部の方には本欄にてお知らせすることになり恐縮です)、今井紀久男さんが三月末にご自宅にて転倒、尾骶骨折でご入院され、まだしばらくはご入院継続となるご様子にて、申し訳ないことながら関係者様の近詠を掲載することが叶いません。今井さんの早期のご快癒をお祈りするばかりです。

そうした中で、以前青葉会から「森の座」に移られご活躍の小西弘子さんから、目出度いお知らせが届きました。この「森の座」からいつも近詠を掲載させていただいている山崎暘亮さんと弘子さんが今年の「森の座賞」を受賞されたそうです。おめでとうございます!!

山崎暘亮さんも以前は青葉会で共に励まれた方だそうで、ご存知の方も多いかと存じます。

「森の座」では五十青史さんというペンネームでご活躍とのことで、将にその実力が評価されたもの、と弘子さんからお知らせでした。一方、弘子さんご自身については、お手伝いの都合で頂いたものと謙遜しておられますが、当青葉会所属時から高い評価を得ていらしたことは周知の事で、お二方の一層のご活躍を願うものです。

「森の座」の選者はその代表の横澤放川氏(現在、日経俳壇の選者)。

孤舟選者の近詠

慟哭に似て流水の袴めきぬ

きのふより空を拡げて初つばめ

仔馬はや天馬夢見て駆けに駆け

ときをりは水のささやき花堅香子

凧高く揚げ蒼天に夢託す

令和五年四月吉日

以上